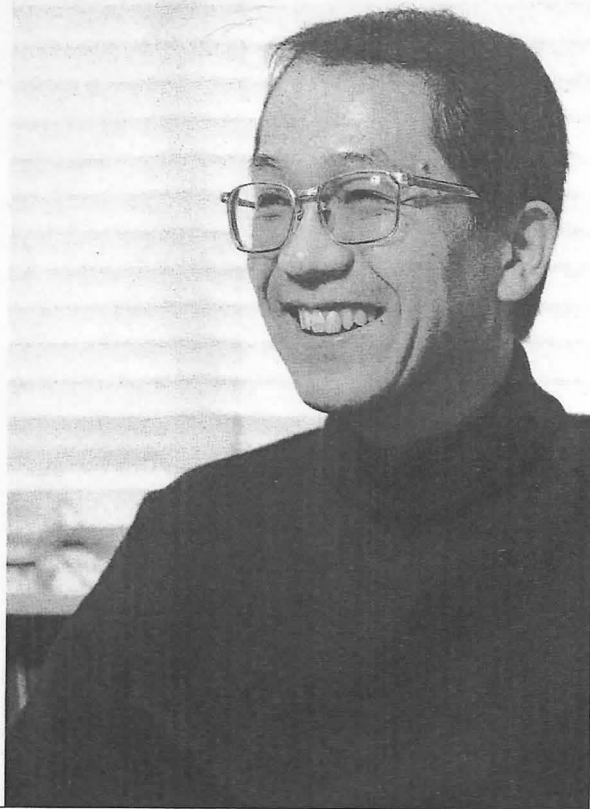


日本人と宗教

東京工業大学教授 橋爪大三郎 *Hashizume Daisaburo*



宗教は、人々の思想や行動に大きな影響を与えている。しかし日本において、宗教がきちんと取り上げられることは稀で、的外れな誤解や偏見を受けることさえある。なぜ、日本人は宗教と上手く向き合えないのか。その思想や行動、歴史的な背景を、橋爪大三郎・東京工業大学教授に伺った。

——日本人の宗教感覚についてお聞きしたいのですが。
その質問がまず、問題ですね。日本人にとって宗教は何と云っても、感覚、フィーリングなんです。日本人の感覚をあげてみれば、「ありがたい」「かたじけない」そして「恐ろしい」。日本人には「死の穢れ」という感覚があって、死は恐ろしいことなのです。

これは自然な感情で、世界中がそうじゃないかと思うかもしれませんが、死体に対する感覚は民族や宗教によってだいぶ違うんです。ユダヤ人は死体を恐れないことで有名です。合理主義に徹底すれば、死んだ人間は存在しないのだから、怖くない。ユダヤ教は靈魂を認めないので、まあ唯物論ですね。インド人も死を怖いとは思わない。輪廻するわけだから、死んだら他の動物に生まれ変わって、どこかに再生する。だから仏教では死体を恐れません。仏教の経典をちゃんと勉強している僧

侶は、死なんて大したことないと思っ
ています。

それとは対照的に、日本ではイザナミ、イザナギの昔から死は穢れでした。死を穢れと思っている民族は多いけれど、日本人の特徴は、現代でもそうであること。そして、他の民族もそう思っていると信じていることなのです。

神は超生命体で、 仏は人間の極限状態

もうひとつ日本人の特徴は、神と仏は全然違うものなのに区別がつかないことです。ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の神は、人間とは違った超生命体です。いっぽう仏は人間で、生きている間に修行をして仏になる。人間の極限状態、それが仏なのです。金属を絶対零度近くに冷やしていくと突然、超伝導という現象が起こるでしょう。常温常圧の状態では想像もできない、超常的な現象が起こる。人間にもそういった潜在力があったら、修行を積んでピュアな状態になると、ふだんは隠れていた本来の性質があらわれてくる。

つまり、神と仏は全くカテゴリーの違うものなのです。それを日本人は区別できない。なぜならどっちもありがたいという「感覚」で一括りにしているからです。仏と神が違うというのは論理ですが、理論よりも感覚を信じてしまう。感覚で宗教を捉える日本人には、いくつもの宗教があることが理解できない。いくつもの宗教があることを間違いだと思う。同じ人間なのにめいめいの宗教にこだわって争うのは愚かであると思ってしまうのですが、これは宗教に対する大いなる誤解なのです。

——宗教を誤解してきたことが、国際社会で、日本人が孤立することにつながっているのでしょうか。

そうですね。日本人は宗教を誤解しているだけで、軽んじているつもりはないのです。宗教を「ありがたい」と思っているのです。お正月は初詣、クリスマスや教会の結婚式、七夕は道教、葬式は仏教でとなる。日本人にとって、宗教は年中行事なのです。こうやって、日本人なりに宗教を精一杯大事にしているのが、宗教を信じている本場の人たち

からすると、いいかげんに見える。いろんな宗教が混在していることを、シンクレティズム（混仰主義）といいます。日本の場合は、汎神論、アニミズムのほうが近いかもしれない。汎神論は、どんなものにも神が宿っているという考え方で、アニミズムは全ての現象や事物の背後に靈魂があるという考えです。「ありがたい」という感覚はこれに近い。そうやって日本人が宗教を大事にすればするほど、本来の宗教のあり方から遠ざかってしまう。日本が国際社会で孤立する一つの理由はここにあるのだと思います。

ではどうすればよいか。日本人の感覚が、外国でも通用すると思わないこと。そして聖書なりコーランなりを、彼ら信者が読んでいる通りに読んでみる。日本人が読むと「ありがたい」で終わります。「イエスは、三日の後に復活した」と書いてあれば、これは文字通り復活した、死体が生き返ってもう一回人間になったと考えるのが正しくて、そう考えないとキリスト教を本当に信じたことにならない。信じる、信じないの境目はそこにある。日本人の「あ

りがたい」では、信じていないことになるのです。キリスト教の使徒信条には復活のことも書いてあるが、その通りに信じなければ使徒とは言えない。

信じる、信じないは、自分の意思決定、態度の問題である。どちらかに決めるしかないのですが、感覚からすると決められないわけです。信じることは日本人にとって、うんと信じる、少しは信じるという、程度問題になってしまふ。でもこれは、人間に対するやり方であつて、神を信じるときのやり方は違うのです。人間関係を処理するやり方で、宗教のことも推し量ろうとするから、絶対ということが理解できない。

宗教は絶対という観念でできていることがピンとこない日本人

日本人は相対大好き民族なのですね。いつばう宗教は「絶対」という観念でできているわけです。ドグマやイデオロギーなど全部そうです。仏教も絶対で成り立っている。悟りとか、法(ダルマ)なんていうのは、

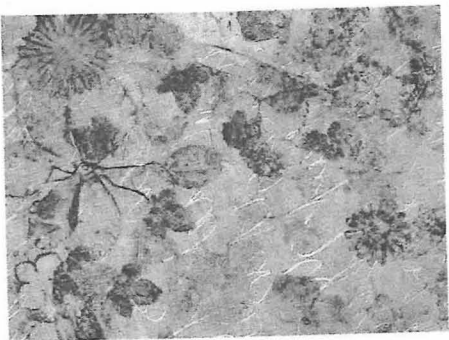
学しよう、自然を科学しようとか、会社経営で利益が上がったら神に感謝して、無駄遣いしないで投資しようとかいう努力が起こってくる。これらの努力が、歴史的な事情で組み合わさつて、資本主義社会、近代社会に至つたわけです。

神に近づく努力と、言葉を精密に使う努力がシンクロしているということですね。

そうです。インド人も一神教ではないけれど、言葉を正確に使いますね。インド人のイマジネーションはすごくて、無量大数など巨大な数やゼロの概念を考えるなど、いろいろなアイデアがインドで発生しています。

ローマ人と中国人は歴史が大好きですが、歴史は「何月何日に誰がどうした」ということを正確に記述すること、そういう事実はくつがえせないと考えます。ある種の絶対です。そういう絶対の記録があるから、行ないを正したり、人民の役に立つ政治的判断をしようと頑張るわけです。

言葉を正確に使うためには、聖典が必要です。みんなが同じ聖典を



人間が泣こうが騒ごうが、どうしようもないものです。諸行無常などの法は、人間など無視して冷厳に貫かれています。宇宙の根本法則。だからそれを受け入れて、限りなくその認識に近づこうとするのが修行の本質です。儒教も然り。天というものがあつて、人間の道というのは昔の人間が手本を示しているのだから、自分たちの都合でそれを変えてはいけな

いものなのです。絶対の、ドグマを信じていることが、文明というものの特徴なのですが、そこがいまひとつピンとこない。まさか本気でそう思っているわけではないよね、とどこかで思つてしまふ。しかし、ドグマを信じる人々がマジョリティーで、日本人はマイノリティーなんです。そして、世界第二の経済大国がこんな考えでは困ると世界中に思われている。

国際社会で日本人が孤立している理由には、自分の思想と行動をきちんと説明してこなかったことがあつたように思ふのですが。

言葉には意味があるけれど、それを精密に使おうとすると難しいこと

んでいれば、正しい解釈と間違つた解釈を討論することができる。そして、みんなに同じ法律を適用することができるので、被告と原告が公平に争う制度ができあがる。みんなが同じテキストを読むことが、言葉を正しく使う原点なのです。

日本人が全員読んでいる聖典がない

では、日本人が全員読んでいるテキストは何か。強いて言うくと、源氏物語くらいしかない。本居宣長によると、源氏物語の本質は「もののはれ」、要するにフィードバックです。それは法律の本でも、歴史の本でも、哲学の本でも、世界について書いてある本でもない。光源氏のような人がいればいいなあというイマジネーションです。

最近の日本人も、読んで楽しいもの、自分が読みたいものだけを読むという傾向にあります。自分が読みたいものを読んで、人が読んでいないものに関心を示さないのは、孤立であり、孤独である。

言葉はみんなのものなのです。み

がわかると思ひます。精密に使うためにある言葉の意味を定義しようとしても、別の言葉に置き換えるだけ。既に精密に定義されている言葉がないとうまく定義できません。では定義の出発点はどこなのか。ぐるぐる回りになるか、定義できない言葉から出発することになる。

われわれの生きている社会、話している言葉は生まれたときから、もうそこに存在していた。死んでからも続いていくだろう。慣習に従つて使つていくしかありません。公理から出発する数学とは違ふんです。社会や言葉とはそういうものです。言葉を正確に使うということは、日常生活で、言語をどれだけ精密にできたかという話です。

そして、この努力をうんとする民族と、うんとしない民族がある。一神教を信じている民族は、この努力をうんとする。なぜなら、言葉は神が人間に教えてくれたもの、言葉は神の中で理想的に調和していると考えている。言葉が曖昧なのは人間が使うから。正確に言葉を使うことが、神に近づく方法になるのです。そこで法律を整備しようとか、世界を哲

なの使う言葉が共通なので意思の疎通が図れる。表現というのは、その土俵に乗つて、自分だけの考えをどこまで言えるかというゲームです。感覚ははじめから個人のものだから、比較する必要がない。ところが、考え、アイデアというのは、感覚とは違つて組み立てるものなので、凡庸で月並みなアイデアと、皆が認めるけつこういいアイデアがある。良いアイデアは、他人に納得してもらつてはじめて良いアイデアになるのです。それをつくり出すには、かなりの労力がある。

本質的に優れたものは、伝えるに値するもの、理解できるものであるはず。思想が素暗らしくて、表現が下手ということはあんまりない。上手く表現する人が、良い思想をもっているのであつて、その逆ではない。思想の場合、表現が大事なのです。

ですからその前提として、みんなが同じテキストを読むことはとても大事です。それは、みんなが同じ思想に関心を持つて、自分たちの関係をつくらうと努力するということ

なのです。

——世界へのアクセスは、交通手段やインターネットの発達で、ますます容易になっていますが、自分の存在する世界以外の世界について、思いを馳せる感受性は希薄になっていくように思います。

思いを馳せるためには、外国のことをよく知れば良いと思いがちですが、ちっとも役に立たないかもしれない。世界を知るために海外旅行に行く。でも日本の眼鏡をかけて世界を見ているので、見たいものしか見えないうわげです。知識は増えるが発見はない。

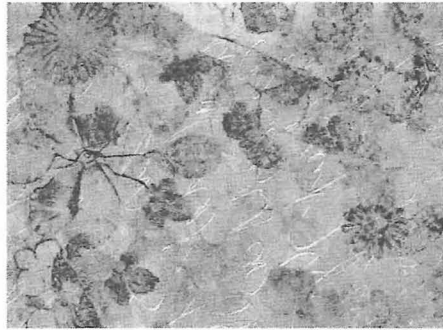
世界を理解するために英語を勉強してみても、英語を使っても、補助的に日本語を使っても、また走る自転車みたいな人が多いのです。日本語を使って英語を理解しているのです。海外旅行も英語も決め手にはならない。海外に出て行って、日本を外から眺めることは、やらないよりはいいが、それでオーケーと思ってもらっても困る。

では、どうしたらいいか。一番いいのは、別の眼鏡をかけて、これま

のコミュニティは、最初に人間がいて、その人間は対等で、自由で、生きていく目的を持っている。その人間が、実際に生きていくためには、警察が、消防が、議会が、裁判所が、行政サービスが必要なので、税金を出して役人を雇うことにする。人民が自主的にコミュニティを形成していったのです。これが近代社会のはじまりでした。

日本は、ムラがなし崩しに近代社会になったので、国家は偉く民衆は地位が低いという官民格差の意識が残っています。官僚がいばっていることと、日本がムラ社会であることとはほとんど同義です。官僚がいばれば、まず業界がムラになる。会社がムラになる。事業部がムラになる。部と課がムラになる。いたるところがムラになって、コストを分担しないくせに、足の引っ張り合いになる。こういうメンタリティーがとても強い。これは民主主義のコミュニティのあり方と全く正反対です。

ムラを運営するためには、自分と相手が同じことを考えていること、そしてそれ以上に、同じことを感じていることが大事です。共通感覚が



で馴染みのない思想をもっている人たち——例えば、イスラム教など——の視点から世界を眺めてみる。哲学・宗教とはもともとそういうものです。宗教はあるものの見方なので、それに素直に従ってみる。「三日後によみがえりました」といえば、本当にそう思っているのだな、と思いがら読む。そこが大事なわけです。

でも、人間には先入見があるから、「そうじゃないよね」と思ってしまう。その先入見と闘って、自分のものの見方を着脱可能なものにするのが大事です。日本人の感覚を着脱可能な状態にする。自分のアイデンティティーを主張するのに、民族性は不可欠ですが、それに固執するだけではダメ。先入見と闘うのは、自分を解放するための試みであり、最後はまた自分本来の場所に帰ってきます。

——近頃、私たちの生きている社会が、とても閉塞感に満ちていると感じるのですが。

人びとの生きている社会がコミュニティですが、日本でコミュニティというムラのことでした。ムラは、室町時代にはじまり、江戸時代に完成

あれば、意見が違ってもなんとかする。

いっぽう民主主義は、感覚については一切問いません、意見の違いは意見で調整する。最後は投票して、民衆が責任を分担する。コミュニティの自己責任の理論を延長すると、タウンができて、タウンの上に州ができて、その上に連邦政府ができる。下から積み上がったのです。

感覚共同体は「らしく」からはじまる

日本は逆で、上から大きな箱をつくって、中くらいの箱をつくって、小さな箱をつくって、そこに人間を押し込めてしまう。小学校に入ったら、小学生らしくしなさい。中学校に入ったら、中学生らしく制服を着なさい。「らしく」というのはみんなに合わせる、つまり感覚共同体の一員となること。日本の教育はこんなやり方でできている。

明治時代は、江戸時代までのムラ社会をぶち壊したのだから、開放感がありました。そして激的な競争社会で、明治時代の初めにはみんな自

しました。ムラは箱Ⅱ垣根からできている。物理的には乗り越えられないが、乗り越えてはいけない垣根です。江戸時代には廓があつて、ぐるりと囲まれていた。町内にもそれぞれ木戸があつて、夜になると閉じられてしまった。そういう幾重もの箱があつて、そのなかで暮らしていくのが日本人のメンタリティーになった。これがムラです。

ムラの特徴は、仲良くしなくてはならないこと。ムラの垣根は、自分たちがつくったものではないので、自分たちで支えていくという感覚がない。この垣根をつくったのは、お上、つまり権力で、権力は自分たちとは関係ない。その権力に逆らうつもりもない。だからその責任は分担しなくていい。文句があれば一揆を起すが、問題が解決したら元のムラに戻るだけ。

ムラと民主主義のコミュニティは似て非なるもの

ムラは民主主義のコミュニティと、似て非なるものなのです。民主主義

作農だったのに、何十年かしたらほとんどが小作農になってしまった。

その関係で、ムラ原理は非常に弱まったのですが、その後、農民が都会に大挙して出てきて、自分たちの居場所を要求しました。そして彼らに職場と住宅と社会保障が行き渡ったところで、ムラが復権したのです。

そうすると、企業も学校も役所も、地域社会もみんなムラになってしまった。そしてそれを、官僚が全部取り切り、本来、人民が取るべき責任を取ることを妨げている。ですから日本は、民主主義社会と胸を張って言えるほど成熟していないのです。民主主義社会を再構築する、これが究極の課題であり、世界と手を携え、同時代を生きていくことにつながるのだと思います。

——ありがとうございます。

●はしつめ・だいさぶろう

1948年神奈川県生まれ。1977年東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。1989年東京工業大学工学部助教授(社会学)。1996年同大学大学院社会学研究科価値システム研究専攻教授、現在に至る。著書に「はじめの構造主義」「天皇の戦争責任」「幸福のつくりかた」「世界がわかる宗教社会学入門」「政治の教室」「強いサラリーマン、へたばる企業」などがある。